少將物語抄

首書繪入
讀曲傳記

下

伊勢書頭

大意

一物語類号に種々の作あり男女和歌を云く作法に二字仮男女浪成
一業平持伝はせ給ひて冊宮に奉り給ひ東国に下り給ふ間歌を詠ぜ
給ひ書留めると没後ほか作法中書く事を流に年月わひ年十三
初めて行く書くものの作法にあり世にいせものがたりとつけ
たり ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがなの
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな
なかれ ひらがな書作る法事 ひらがなの書作る法事 ひらがな

西のざいまし人のそれとしらるるまでぞ
しぬるうきはうんゆきとぶらひそ
ぞりれわびたぞよかまたりおるがきひ
人のりうべきかやもあげりまれだとと
ちりひつらんまころろスのきれむ月は梅の花
ざりたぞとひいさてぞちておてみ
ごもぞたはべてわびちるびておぐち
いてきたぞ月ろぶくまでぞりてぞ
りひ出くよめ
月ちめぬまやまれまるぬ
たぞみくまれのぐとろたるくくたり
若男がこたりぞひんぐれよ家まるたぞまべて
いきまんぞかるれがぐちりとえいぞ

わるめ
月とみよ月まもひ
まるるりのこてこ
るのありれまれ月よかりくまもりこの去
ちなりぬこわもいん
とすまハニナこのれざり
あまハをゆのようをて
まるりこれとたりれ序
よ心あまりそこだたび
とりをへとてころ
われりたこ
ぞりて よんでと歌へし
又 おれ花ちかれ二ろ
ろへちのぶし
まるるるれ ひそるに
ちのぶし歌けすし
問りしえるぞ
たくにるるれた門
まるへぐるあみどを
たしひるのしたべるかを
のべまるりとるまるあ

六 女のえうまじかりける… 二条后の兄弟国経… [illegible]

二条の后ハ… [illegible]

…堀川… [illegible] …前尾…

のくづれよりかよひけり人
しげくもあらねどたびかさなりけれバあるじきゝつけて
そのかよひぢに夜ごとに人をすへてまもらせけれバ
いけどもえあはでかへりけり さてよめる
人しれぬ我かよひぢの関守ハよひ〳〵ごとにうちもねなゝん
とよめりけれバいといたう心やみけり あるじゆるしてけり
二条のきさきにしのびてまいりけるを世のきこえありけれバ
せうとたちのまもらせ給ひけるとぞ

六 むかし男ありけり女のえうまじかりけるを年をへて
よばひわたりけるをからうじてぬすみ出ていとくらき
にきけり 芥川といふ河をゐていきけれバ草のうへに
をきたりける露をかれハなにぞとなん男にとひける
ゆくさきおほく夜もふけにけれバ鬼ある所ともしらで神
さへいといみじうなり雨もいたうふりけれバあばらなる
くらに女をバおくにおしいれて男弓やなぐひをおひて
戸口にをり はや夜もあけなんとおもひつゝゐたりけるに鬼
はや一口にくひてけり あなやといひけれど神なる
さはぎにえきかざりけり やう〳〵夜もあけゆくに
見れバゐてこし女もなし あしずりをしてなけどもかひ
なし
しら玉かなにぞと人のとひし時つゆとこたへてきえなまし
物を これハ二条の后のいとこの女御の御もとにつかう
まつるやうにてゐたまへりけるを かたちのいとめでたく
おはしけれバぬすみておひて出たりけるを 御せうと
ほり川のおとゞ 太郎国経の大納言まだげらうにて
内へまいりたまふにいみじうなく人あるをきゝつけて

○父はなほ人 [illegible]
○母なん藤原なりけり [illegible]
○むこがね 聟かね [illegible]
○みよしの [illegible]
○たのむのかり [illegible]
○ひたふる 一向 [illegible]
○君が方に [illegible]

しくて京に思ふ人なきにしもあらずさるおりしもしろき
鳥のはしとあしと赤きしぎの大きさなる水のうへにあ
そびつゝいをゝくふ京にはみえぬ鳥なれば
みな人見しらずわたしもりにとひければこれなんみ
やこ鳥といふをきゝて
名にしおはゞいざことゝはん都鳥わが思ふ人はありやなしやと
とよめりければ舟こぞりてなきにけり

十 むかし男むさしの国までまどひありきけりさて
その国にある女をよばひけり父はこと人にあはせん
といひけるを母なんあてなる人に心つけたりける父は
なほ人にて母なん藤原なりけるさてなんあてなる人に
とおもひけるこのむこがねによみておこせたりける
すむ所なんいるまのこほりみよしのゝ里なりける
みよしのゝたのむのかりもひたぶるに君が方にぞよるとなくなる
むこがね返し
わが方によるとなくなるみよしのゝたのむのかりをいつかわすれん
となん人の国にても猶かゝる事なんやまざりける

十一 むかし男あづまへゆきけるに友だちどもにみちよりいひおこせける
わするなよほどは雲ゐになりぬとも空行月のめぐりあふまで

十二 むかし男ありけり人のむすめをぬすみてむさしのへゐてゆくほどにぬす人なりければ国のかみにからめられにけり女をばくさむらの中におきてにげにけり道くる人此野はぬす人あなりとて火つけんとす女わびて
むさしのはけふはなやきそ若草のつまもこもれり我もこもれり
とよみけるをきゝて女をばとりてともにゐていにけり

十三 むかしむさしなる男京なる女のもとにきこゆれば

十三 ひさしぶりの女

十四 ちかごろのいき

十五 若みちのくの人

十六 ひしきのわりつけ

十七 みでらこころ

行家みすがしきなか

十九

女の袖のうへうへ　深川

二十

二十一 [illegible]

[illegible]

[illegible] 世のそしりを [illegible] 婦ハ
[illegible] 女 [illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible] 年月を [illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible] 人の心 [illegible]
[illegible]
[illegible]

廿二 [illegible] 世 [illegible]
[illegible]
[illegible] 女のうしなふ [illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible] 水の [illegible]
[illegible]
[illegible]

廿三 [illegible] 夜のちぎ [illegible]
[illegible]
[illegible] 人の子 [illegible]

二十二

二十三

[illegible]

さ女いとようけさうじてうちながめて

風ふけばおきつしら浪たつた山よはにや君がひとりこゆらん

とよみけるをききてかぎりなくかなしとおもひて河内へもいかずなりにけりまれまれかの高安にきてみればはじめこそ心にくもつくりけれいまはうちとけて手づからいゐがひとりてけこのうつはものにもりけるをみて心うがりていかずなりにけりさりければかの女やまとの方を見やりて

君があたり見つつををらんいこま山雲なかくしそ雨はふるとも

といひて見いだすにからうじてやまと人こんといへりよろこびてまつにたびたびすぎぬれば

君こんといひし夜ごとにすぎぬればたのまぬものの恋つつぞふる

といひけれど男すまずなりにけり

廿四

昔男かたゐなかにすみけり男宮づかへしにとてわかれおしみてゆきけるままに三とせこざりければまちわびたりけるにいとねんごろにいひける人にこよひあはんとちぎりたりけるにこの男きたりけりこの戸あけたまへとたたきけれどあけで歌をなんよみて出したりける

あらたまの年の三とせをまちわびてただこよひこそにゐまくらすれ

といひ出したりければ

梓弓ま弓つき弓年をへてわがせしがごとうるはしみせよ

といひていなんとしければ女

あづさ弓ひけどひかねど昔より心は君によりにしものを

といひけれど男かへりにけり女いとかなしくてしりにたちておひゆけどえおひつかで清水のある所にふしにけりそこなりける岩におよびの血してかきつけける

あひ思はでかれぬる人をとどめかねわが身は今ぞきえはてぬめる

とかきてそこにいたづらになりにけり

廿五

むかし男ありけりあはじともいはざりける女のさすがなる

廿四

廿六

廿七

廿八

廿五

[illegible]

〇秋のよさ[illegible]

〇こゝろ[illegible]女

[illegible]

廿六 六条[illegible] 二条[illegible]

[illegible]

廿九 [illegible]

昔[illegible]の[illegible]花のごとく[illegible]

三十 花[illegible]

むかしおとこ[illegible]女のもとに

三十一 [illegible]

[illegible]

三十二 [illegible]女[illegible]

[illegible]

[illegible]

廿七 女のもとに[illegible]

[illegible]

三十三 [illegible]

三十四 むかしおとこ[illegible]

三十五 [illegible]

三十六 [illegible]女のもとに

三十七 むかしおとこ[illegible]女[illegible]

[illegible]

三十三 [illegible]

[illegible]

三十四 [illegible]

三十五 [illegible]

三十六 [illegible]

三十七 [illegible]

三十八 [illegible]

三十九 [illegible]

[illegible]

ひざにあるれば下の女のこゝにはいつくしくもうつくしう
もあるこゝにうの車と女車とをくらべてこゝろ
なるあるひさにかのいろいろ雲とうりて女車にへ
うまるる[illegible]車しきりに人けぶりのとりあやつるやうにもらん
とりたちもんをうてのれるおとこのあり
出そいそぎぶりぬべきほどにはちまゝにあるとき
かのつてをこゝ
いとはまうぐぞあるらにとしけちまゝるもとはなるぞ
あれるのあれのこれをあくいるはぞあるまうぐ
いたうぐつあるありぐうりぐんのあいす

四十 [illegible]

[illegible]男ぎうあるゝ無はひとりぐうらて
ふあやありてぐひりぐうるそけ女とりくとひゆん
うんざうそいるあるとひゆくへのあるれぐまぐか
[illegible]

[illegible]

三十七 [illegible]

三十八 [illegible]

三十九 [illegible]

四十 [illegible]

四十一 [illegible]

四十二

四十三

[illegible]

四十二 あひのつまもとめてこそ
[illegible]

四十三 [illegible]

四十四 [illegible]

四十五 [illegible]

四十六 [illegible]

くもりひまもなくうん行く色の界はれ人の心はかうまこと
ものまねびさまゆよりこと　おろまてぐ人うまれぬやう
めるうもかりのうるこ流つ行けるまれかりけるを
四十七　もしかと祈んぐよいでとらあてこそりぐれぐ心ちことを
だりしやすそぐまうれ　たあのぐ行ていつか
たあるの川はあまるこれ取るまぐ人ぐえてその後ごりかき
あしかなこ
四十八　たあなさとみたたそたたれまこのれく流まえぐ心ちこ者と
もしぐ男のたりぐあれるもげせんそぐ人とまち
りるこぐ行かきれど
今てまうるあきゆぐ星をぐれぐうぐまり

伊勢物語

九十二

九十三

九十四

九十二

九十三

九十四

九十五
九十六
九十七
九十八

○よくてやあしくてや[illegible]
女のゆくゑをしらず[illegible]

九十七 堀川のおほいまうちぎみ [illegible] 四十賀 [illegible] 九條の家 [illegible] ○桜花ちりかひくもれ [illegible]

九十八 おほきおほいまうちぎみ [illegible]

九十九 [illegible] 右近の馬場のひをりの日 [illegible] 五月 [illegible] 東の [illegible] 中将なり [illegible]

百 後涼殿のはさま [illegible]

秋風ふきたちなん時かならずあはんといへりけり。秋まつころほひに爰かしこより、その人のもとへいなんずなりとて、口舌いできにけり。さりければ女のせうと、にはかにむかへにきたり。されば此女、かえでのはつもみぢをひろはせて、哥をよみて、書つけておこせたり

秋かけていひしながらもあらなくに木葉ふりしくえにこそ有けれ

と書おきて、かしこより人おこせば、これをやれとていぬ。さてやがてのち、つゐに今日までしらず。よくてやあらん、あしくてやあらん、いにし所もしらず。かの男は天のさかでをうちてなんのろひをるなる。むくつけき事。人ののろひごとは、おふものにやあらん、おはぬものにやあらん。今こそハみめとぞいふなる

九十七

昔堀川のおほいまうちぎみと申す、いまそがりけり。四十の賀、九条の家にてせられける日、中将なりける翁

さくら花ちりかひくもれおいらくのこんといふなる道まがふがに

九十八

昔おほきおほいまうちぎみときこゆるおはしけり。仕うまつる男、長月ばかりに、梅のつくり枝に雉をつけて奉るとて

わがたのむ君がためにとおる花は時しもわかぬ物にぞ有ける

とよみて奉りたりければ、いとかしこくおかしがり給ひて、使に禄たまへりけり

九十九

昔右近の馬場のひをりの日、むかひに立たりける車に、女のかほの下すだれよりほのかに見えければ、中将なりける男のよみてやりける

見ずもあらず見もせぬ人の恋しくはあやなくけふやながめくらさん

返し

しるしらぬなにかあやなくわきていはん思ひのみこそしるべ成けれ

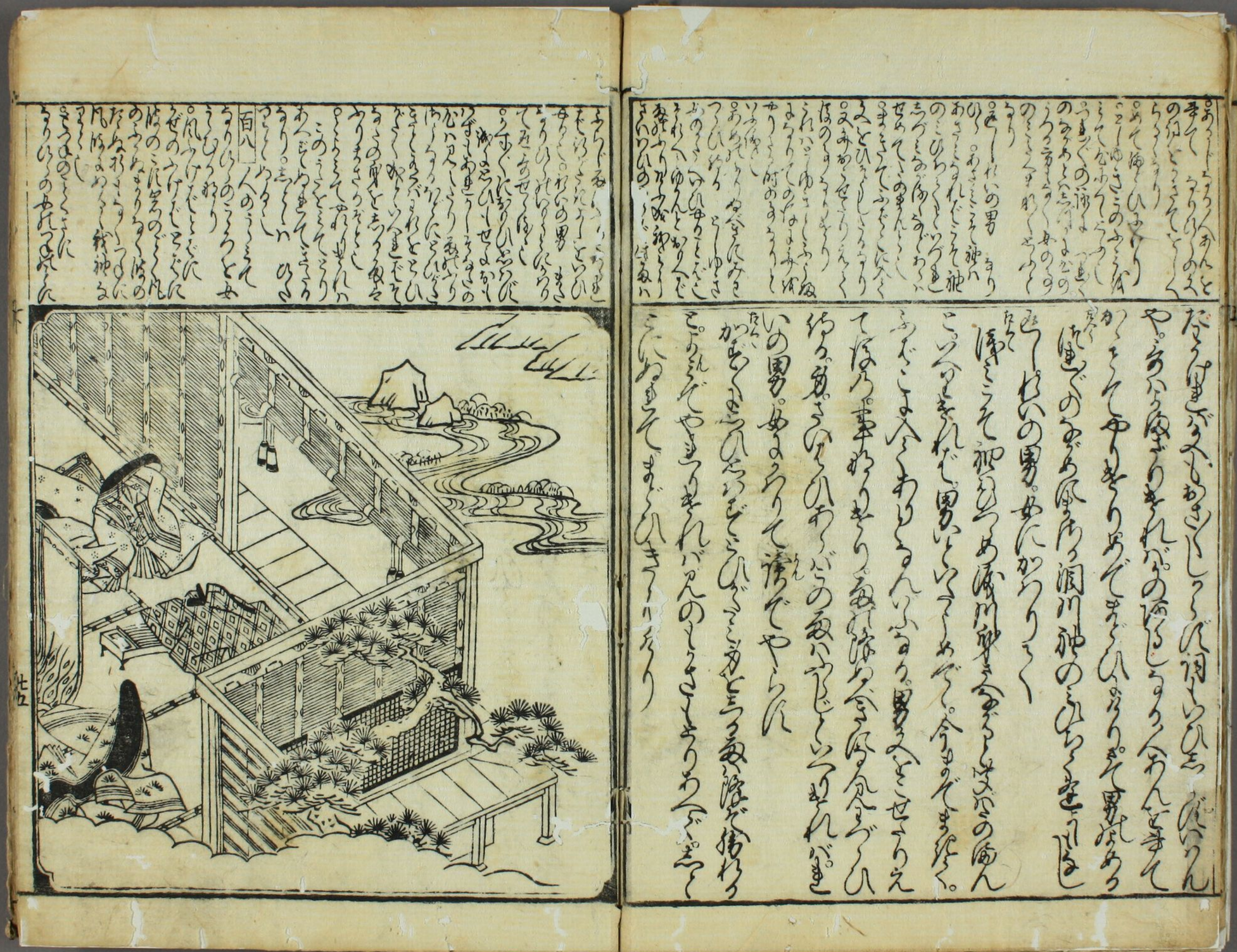
のちはたれとしりにけり

百

昔男後涼殿のはさまをわたりければ、あるやんごとなき人の御つぼねより

百二
百三
百四
百五

百六
百七
百八
百九



[illegible]

百八 むかし女人の心をうらみて
風ふけばとはに浪こす岩なれや我衣手のかはく時なき
とつねのことぐさにいひけるをきゝおひける男

百九 昔男友だちの人をうしなへるが許にやりける
花よりも人こそあだになりにけれいづれをさきにこひんとか見し

百十 昔男みそかにかよふ女ありけりそれがもとより
こよひ夢になんみえ給ひつるといへりければ男
思ひあまり出にし玉のあるならん夜ぶかく見えば玉むすびせよ

百十一 昔男やむごとなき女のもとになくなりにけるをとぶらふやうにて
いひやりける
いにしへはありもやしけん今ぞしるまだ見ぬ人をこふる物とは
返し
下ひものしるしとするもとけなくにかたるがごとはこひずぞあるべき
又返し

[illegible]

恋しとはさらにもいはじ下ひものとけんを人はそれとしらなん

百十二 昔男ねんごろにいひちぎりける女のことざまになりにければ
すまのあまのしほやく煙風をいたみおもはぬかたにたなびきにけり

百十三 昔男やもめにてゐて
ながゝらぬ命のほどにわするゝはいかにみじかき心なるらん

百十四 昔仁和のみかどせり河に行幸し給ひける時今はさること
にげなく思ひけれどもとつきにける事なればおほ
たかのたかゞひにてさぶらはせ給ひけるすりかりぎ
ぬのたもとにかきつけゝる
翁さび人なとがめそかりごろもけふばかりとぞ鶴もなくなる
おほやけの御けしきあしかりけりおのがよはひを
思ひけれどわかゝらぬ人はきゝおひけりとや

百十五 昔みちの国にて男女すみけり男都へいなんといふ
此女いとかなしうてうまのはなむけをだにせんとておきの

百十三 [illegible]

百十四 [illegible]

百十五 [illegible]

百十六 [illegible]

百十七 [illegible]

百十八 [illegible]

百十九 [illegible]

[illegible]

百廿

[illegible]

百廿一

[illegible]

百廿二

[illegible]

百廿三

[illegible]

百廿四

[illegible]

百廿五

[illegible]

終

[illegible]

宝永五戊子歟十六

近代八特使事平易陽らく市出家事代らく人々書題
不可用らく付物張右人々説々不同或云云中わく
自書或称俳諧名作流彼此有書為事平ふと
右らく人俗ふて為其作者只々称初花之趣而已

戸部尚書　主刻

俳諧初代板行世間人々のとゝのひ或らく
るのつゝしみあやまりくれあり
みちびくまゝ世るはしめ大意をもつて
ゝうゝ世を対前之人抜を加へ板行者也

絵師　菱川吉兵衛

三月吉日

松會開板